

特別陳列「栗東とくすり」

平成18年3月26日(日)～5月7日(日)

栗東歴史民俗博物館



展示会場風景

ごあいさつ

健やかに生活したいという願いは、時代を問わないものでしょう。病を避け、あるいは軽く留めようとする医薬は、人々の生活に深く結びついてきました。

江戸時代の栗東では、なんとといっても東海道梅ノ木立場の腹薬「和中散」が有名でした。またほかにも東海道や中山道沿いの村々を中心に、多くの薬が作られました。これらは明治以降、制度の近代化や、西洋医学の流入に伴い消えていきましたが、伝来の医薬資料や、屋号、地名などとして痕跡を今に残しています。

本展では、栗東という土地にはぐくまれた医薬の中でも、とくに薬に焦点を当て、江戸時代から昭和ごろまでの様相を紹介します。

最後になりましたが、開催にあたりご協力を賜りました皆様方に、厚く御礼を申し上げます。

平成18年3月

栗東歴史民俗博物館

【一】街道とくすり

現在でも、慣れない旅の途中、体調をくずして薬のお世話になる人は少なくないでしょうが、江戸時代にも旅の道中に薬は欠かせないものでした。また、軽くかさばらず、いたみにくいため、薬は土産としても珍重されたといえます。

東海道、中山道という二大街道が通っていた現在の栗東市域では、なんといっても東海道梅ノ木立場（うめのきたてば）の腹薬「和中散」和中西散（わちゅうざん）が全国的に有名でした。

しかし、栗東の薬は決してそれだけではありません。街道沿いの村々では、多くの薬が街道を意識しながら製造販売されていたのです。

東海道筋のくすり

・梅ノ木立場(六地藏村):栗東市六地藏 ...[くすり]「和中散」
「伊吹艾」などノ和中散屋(大角家、織田家、嶋林家など)、亀屋善蔵艾店など

・手原村:栗東市手原 ...[くすり]「仙伝虫脱丸」などノ猪飼家
・伊勢落村:栗東市伊勢落 ...[くすり]「免痘散」ノ徳生寺

中山道筋のくすり

・縷村:栗東市縷 ...[くすり]「縷村膏薬」「大宝山仏眼寺丸」
「神応丸」などノ薬屋源兵衛家など

・中沢立場(中沢村):栗東市中沢 ...[くすり]「和中散」など

金勝道(東海道筋川辺より金勝川上流へむかう)筋のくすり

・下戸山村:栗東市下戸山 ...[くすり]「万治膏」「御目くすり」
ノ川崎翠松軒

・上砥山村:栗東市上砥山 ...[くすり]「中村家方丸薬」

その他

・出庭村:栗東市出庭 ...[くすり]「萬金丹」「黒丸子」などノ園田久寿軒
東海道と中山道に挟まれる立地で、くすりは東海道筋梅ノ木立場でも販売されていた。

和中散の販売戦略

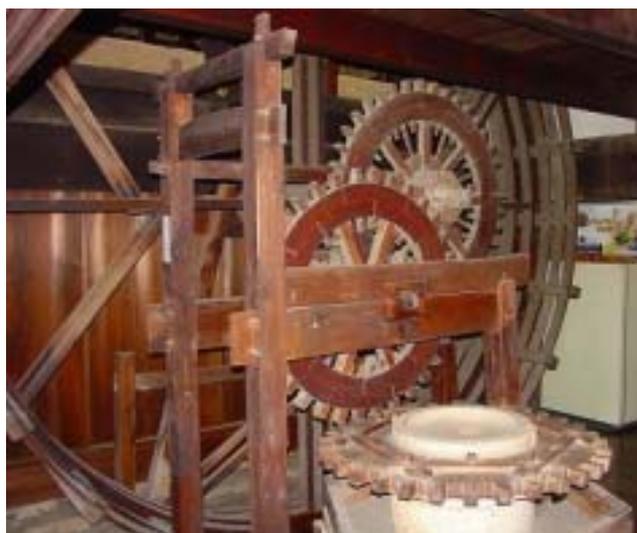
江戸時代、東海道沿いの梅ノ木立場には名物の腹薬「和中散(わちゅうざん)」を売る店が複数あり、商売を競いあっていました。

そんな中から生まれた販売方法には、現在にも通じる工夫がたくさんあります。

実演販売

店内には木製の巨大な製薬動輪があり、薬の原料を粉に引く石臼を人力で動かすありさまが、街道からよく見えるようになっていました。

街道に面した広い畳敷きの店先には、大きな茶釜が据えられました。旅人にせんじたての薬湯が振る舞われたともいいます。



旧和中散本舗大角家 製薬動輪

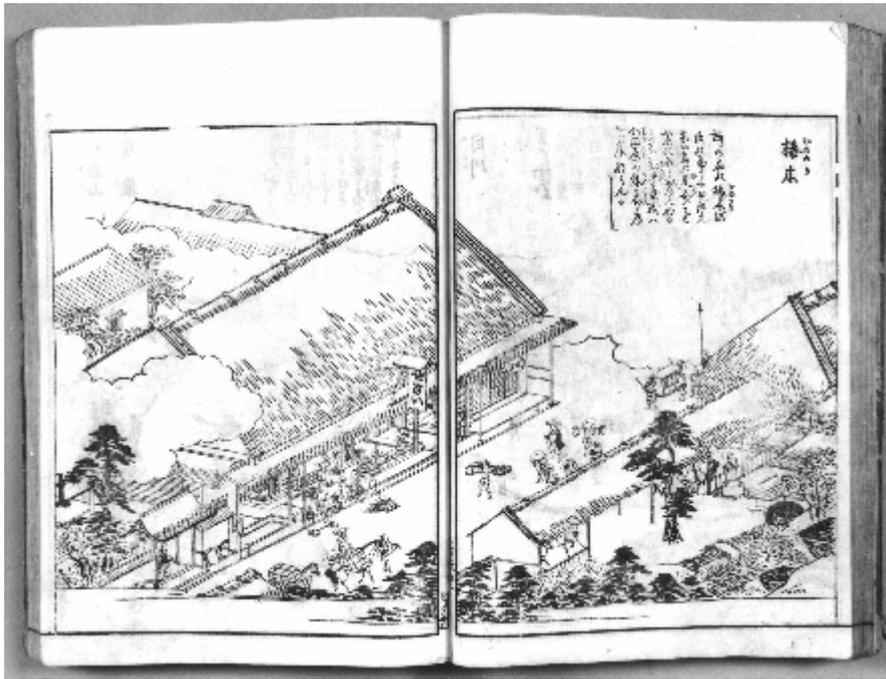
1・東海道名所図会 卷一「梅木」

一冊

縦二五・四cm 横一八・一cm

江戸時代 館蔵

梅ノ木立場の和中散屋を描く。「ぜさい」「和中散」などの看板をかけた、店先では茶碗に注いだ薬湯を旅人に振舞っている。
和中散を売る家は「是齋(定齋)ぜさい／じよさい)、ぜさい)」などと名乗り、是齋屋と称された。



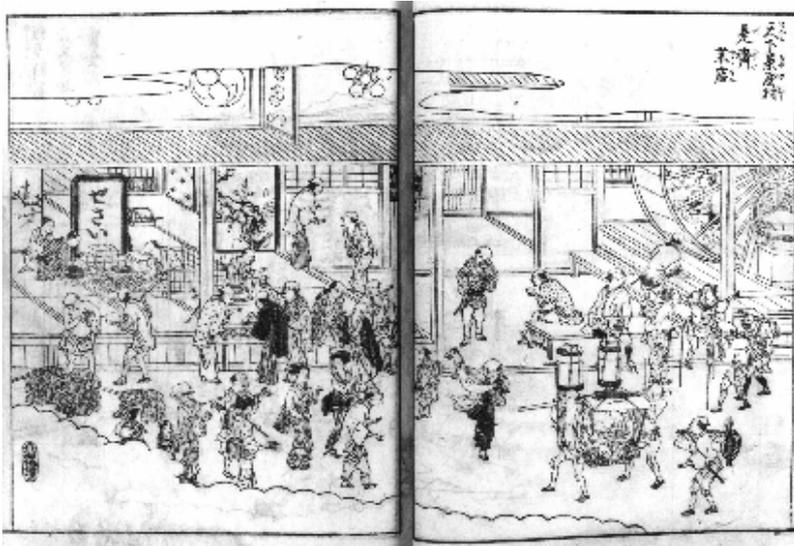
2・撰津名所図会 住吉郡一

一冊

縦三五・七cm 横一八・一cm

江戸時代 館蔵

天下茶屋(現大阪市大正区)にあった織田家和中散の店先の様子。複数あった和中散屋の中でも、織田家は積極的に外に売りに出て商売を拡大した。画面むかって右手の店内では、成人男性二人が製薬動輪の中に入って動輪をまわしている。街道に面した店先では、ふるまいの薬湯をすすりながら旅人が足を休めている。基本的な店のつくりは、どこの和中散屋も共通であった。



(部分)

3・東海道五十二駅名物合

一枚

縦四七・六cm 横三二・〇cm

文化一四年(一一一七) 館蔵

東海道を浜松(静岡県)を境に東西にわけ、沿道の名物を番付に仕立てている。上段むかつて左の西方前頭二枚目に「梅木 和中散」がみえる。

和中散に相對する東方前頭二枚目には「小田原 外郎」が置かれ、両者は東西並び稱される名菓であった。

4・ぜざい茶碗

一口

高四・〇cm

館蔵

側面に「目野木ぜざい」とある。近年、甲賀市信楽町で採取された。

梅ノ木立場の是齋屋で、あるいはこういつた名人入りの茶碗が使われていたのだろう。

1)当地限定の全国展開

「此家より一切他国へ売り出し申さず候」と、ここに来なければ買うことが出来ない希少価値を前面におしだす店と、「昔より売弘め申し候」と、商いの規模の大きさを全国に知られていることを主張する店とがあり、お互いに競い合っていました。

5・版木

四点

江戸時代

(A) 旧和中散本舗大角家蔵

(B) 館蔵

菓の包紙を摺るために使用した木版。(A)は大角家和中散で、(B)は織田家

和中散で使用されたもの。

(積文)

(A)

・和中散包紙版木

「伊勢屋大角弥右衛門／梅木本方／江州栗太郡石部草津之間／梅木村本元わちうさん／此家より一切他国へ売出シ不申候」

・伊吹艾包紙版木

「伊吹山御艾所／江州栗太郡石部草津之間／梅木村本家大角製／此家より一切他国売出不申候」

(B)

・和中散包紙版木

「昔より売始候／江州栗太郡石部草津之間／梅木村本家ぜざい／此家之外一さい他国売出し不申候」

・伊吹艾包紙版木

「伊吹山御艾所／江州栗太郡石部草津之間／梅木本家ぜざい／昔より売弘申候根本ニ紛無御座候」

街道とくすり

6・六地藏村街道筋軒別絵図

一鋪

縦三二・七cm 横八六・三cm

江戸時代 館蔵 里内文庫

江戸時代、梅ノ木立場のあった六地藏村の街道筋の様子を記す。三軒の和中散屋が記される。いずれも参勤交代の大名などが休憩する小休本陣を兼ねた。寛政一三年（一八〇一）に江戸から大坂にむけて東海道を旅した大田蜀山人は紀行文『改元紀行』の中で五軒の和中散屋の存在を記している。この絵図に記される大角家、嶋林家、織田家の三軒のほか、「中出（中庭で）」「東出」の屋号の残る大角家系の出店とみられる。

《大田蜀山人『改元紀行』より》

は編者加筆

左のかたにはじめて梅の木和中散といへるみせあり（※東出）。聞しにも似ず小さなみせと思ふに、又おなじみせあり。二軒目（※中出）。三軒目のみせよろし（※大角家）。四軒目（四軒め、根元いゑ、定歳）これにつぐ。島林定歳としるせり（※嶋林家）。五軒目を本家せさいといふ（※織田家）。

7・「わちうさん」置看板

一基

縦一四八・八cm 横八八・〇cm 高八八・〇cm

旧和中散本舗大角家蔵

大角家和中散のみせの真ん中に据えられた大きな置看板。画面には「本元家梅木村元祖」「わちうさん」「かな書看板外二類なし」と記す。漢字の「和中散」ではなくひらがなで「わちうさん」と書くのはこの店だけであるとして、他店と区別をはかっている。



8・「本家せさい」掛看板

一枚

縦八〇・〇cm 横一一〇・五cm

旧和中散本舗大角家蔵

旧和中散本舗大角家に伝来した。「根本梅木 本家せさい」と両面に彫られる、街道に面した軒下に掲げられた。

同様の形をした看板は『東海道名所図会』にも描かれている。

9・「和中散」掛看板

一枚

縦八四・八cm 横四八・七cm

館蔵

「御香具所根本梅木、和中散大和、大掾藤原定斎」と彫られる。嶋林家和中散の資料。

和中散屋は、嶋林家の「大和、大掾」をはじめ、大角家が「伊勢、大掾」、織田家が「近江、大掾」の受領名をそれぞれ名乗った。

くすりをつくる道具

散薬（粉薬）である「和中散」は、おおむね次のようにして作られた。

- ① 薬種（漢方薬の原料）を刻む … 使う道具／「片手切」など
 - ② さらに細かく粉碎する … 「薬研」「石臼」など（製薬動輪は石臼を動かすための仕掛け）
 - ③ ふるいながら混ぜ合わせる … 「ふるい」など
- なお、丸薬（粒状の薬）であれば、粉碎したあとに炊いた米などと混ぜて練り合わせ、形を整える。

10・製薬道具 一式

江戸時代 旧和中散本舗大角家蔵

・薬研 一組

薬を調製するのに使う道具のひとつ。薬種（漢方薬の原料）を舟形の台に入れ、車輪状の器具を動かして押し砕く。

・片手薬研 一組

「片手切」「片手盤」などと呼ばれる道具で、薬種（漢方薬の原料）を細切れにするのに使う。硬く乾燥した薬種も、力を入れて刃を滑らせたりせずに切る事ができた。

・薬刀 一点

薬種を切るのに使う。柄に「大角」と刻まれている。

・製薬用ふるい 一点

石臼で細かく挽いたそれぞれの薬種を、分量を量ってこの中に入れ、ふるいおとしながら混ぜ合わせて製品にした。

箱の中には目の細かい絹地を張った篩が入っており、蓋をした状態でつまみ

を動かすと篩が平行移動する。蓋をしたままふるえるのは、細かい粉末になった薬が舞い上がらないための工夫である。

これは小型だが、大量に生産していた当時につかわれていたのは、一抱えほどもある大きなものという。

11・大角家和中散版木類

江戸時代 旧和中散本舗大角家蔵

大角家では、和中散のほか、金功丸、黄膏、神教丸、鎮火五冷散など多くの薬を商った。

また和中散の包紙の版木の中には、宝暦十一年（二七六一）や文政十一年（一八二八）の年記のあるものも見える。

12・織田家和中散版木類

江戸時代 館蔵

織田家和中散にゆかりの版木とみられる。織田家でも、和中散のほか、開運勝利丸、軍中散、鶏卵薬などを商った。

和中散の包紙のデザインは、大角家のものとも非常によく似ている。

13・守護開運勝利丸由緒并効能書

一通

縦一七・六cm 横四八・一cm

江戸時代 館蔵 里内文庫

守護開運勝利丸は、和中散とならぶ織田家和中散の代表的な薬。

ここでは江戸時代初頭に活躍した天海大僧正（一五三六〜一六四三）の宝庫から得た秘方とし、病だけでなく、開運や勝利、商売の利益、妖怪の害を逃れることに至るまで、あらゆる効用を述べている。

一子相伝とされ、薬種の配合は暗号のように記され詳細は「口伝」とされた。宝暦十一年（一七六一）正月元旦に調合したとの年記がある。

14・伊吹艾亀屋掛看板

一枚

縦一四六・〇cm 横四〇・〇cm

江戸時代 個人蔵

梅ノ木立場の艾屋、亀屋善蔵艾店の軒先に掲げられた看板。亀屋の名にちなんで亀の彫り物がとりつけられる。

伊吹艾は柏原宿（現米原市）の名物として名高いが、梅ノ木立場周辺にも艾屋は多かった。寛政一三年（一八〇一）に江戸から大坂への道中にこのあたりを通過した大田蜀山人も『改元紀行』に「此わたり伊吹艾うるみせ多し。みな亀屋といへる家名なり」と書き記している。

15・伊吹艾亀屋置看板

一基

縦一四四・五cm 横七九・〇cm

江戸時代 個人蔵

梅ノ木立場の艾屋、亀屋善蔵艾店の置看板。置看板は店内の中心に目立つように据えられ、デザインにも工夫が凝らされた。ここでは亀屋の名にちなんで、本物のように精巧かつ立体的に彫りだした一對の亀を取り付けている。

16・シーボルト『日本』

縦二七・二cm 横一九・四cm

館蔵

シーボルト（一七九六〜一八六六）はドイツ人の医師。文政六年（一八二三）から同一二年までの間、オランダ商館の医員として日本に滞在し、調査や資料収集にあたった。

文政九年（一八二六）、オランダ商館長の江戸参府に随行した際に梅ノ木立場を通り、和中散の店にも滞在して主人と交友を深めた。

《シーボルト『日本』より》

※は編者加筆

三月二六日 七時に草津をたつ。切れ目ない家並みとなつて長く続いている村々を通り過ぎ、梅木村にある有名な薬屋のたいへん心地よい東屋で休み、評判のいくつかの薬を買った。神の力をもつ丸薬という意味の神教丸、ヨモギを粉末にした艾、何千何万の黄金のねり薬という萬金丹、膏薬の天真膏、誤ったオランダ語で「Vrugmakende Mittel」と書いてある万天油などである。私は後屋で薬を細かくひくために備え付けた踏臼を注意深く眺め、いくつかの大きな俵が開いていて、そこにセンブリとダイダイの乾かしたものを見つけたときに、この有名な万能薬、ことに胃痛や頭痛に効く和中散の秘密を偶然に発見したのである。私はすでに以前からセンブリをすぐれた苦い薬として知っていた。それはダイダイの皮とともにその売薬の二つの主成分をなしている。主人はわれわれを手厚くもてなしてくれたが、使節が彼に敬意を表さず、茶菓を受けなかったことを残念がった。私は彼が来ないのは気分が悪いのであると詫び、親切な主人と家族にいくらかの贈り物をした。自分の庭をていねいに手入れしているところから判断して、この男（※薬屋の主人。大角弥右衛門か）は植物の愛好家と見受けられたので、周囲の山々から植物を採集し、京都にいる私の友人を通じて、出島へ送り届けてくれるように頼んだ。私は、植物に恵まれた土地では、いつもこういうふうに採集を頼み、多くの珍しい植物を探し出す。

17・神教丸・天真膏包紙

館蔵 里内文庫

梅ノ木立場の大角家和中散に関わる資料。天真膏の包紙に「大角梅雲軒」とある。

シーボルトの記した『日本』にも、梅ノ木立場の和中散屋に、神教丸や天真膏が売られていた記事がみえる。

18・萬金丹看板 一枚

縦一一五・〇cm 横三五・八cm

江戸時代 個人蔵

出庭村（現 栗東市出庭）で製薬と薬種（漢方薬の原料）の販売業を営んだ園田喜兵衛家の看板。上方に描かれた山の形は、出庭村からもよく見える三上山を象ったものという。

裏面には、家伝萬金丹の元祖は園田家十一代の園田為恒（一七九八〜一八六三）であると記されている。為恒は園田家中興とされた為名の子。萬金丹と並んで園田家で販売された薬である黒丸子も、為恒を祖とする。



19・萬金丹紙着看板版木 一枚

縦七〇・八cm 横二三・八cm

江戸時代 個人蔵

看板と同じデザインを刷る。展示の表面が墨、裏面は赤色の二色刷りで、三上山の形の部分に赤い色が入るようになっていて、

下方に「取次所」とあり、萬金丹を販売する店に渡して使ったものか。

20・黒丸子引札版木 一枚

縦二二・二cm 横四三・五cm

江戸時代 個人蔵

黒丸子は、明治初頭まで作り続けられた園田家の代表薬のひとつ。

名医半井道三が梅ノ木村に住したとき、織田ぜさいの先祖に処方を受けた薬であるとされ、園田家で最初に黒丸子を調合したとされる園田為恒がその弘人（ひろめにん）とされている。

めまいや立ちくらみ、腹痛などのほか、看病する人が服用すれば病をうつさないなどの効用をうたう。

21・人參六味丸薬品分量附 一通

縦三四・八cm 横四七・七cm

江戸時代 館蔵 里内文庫

人參六味丸は、萬金丹や黒丸子と並ぶ園田家の代表的な薬。「是齋織田彦十郎代々家秘」で「南光坊僧正御伝の薬」と記される。

織田彦十郎は、梅ノ木立場の和中散屋。

南光坊僧正は江戸時代初頭に活躍した天海大僧正（一五三六〜一六四三）のこと。高僧や神仏の靈験などをかたり薬の権威を高めることは、明治になるまでよく行われた。

22・萬金丹薬種分量書 一通

縦三三・八cm 横四八・二cm

江戸時代 館蔵 里内文庫

萬金丹は、出庭村（現 栗東市出庭）の園田久寿軒で売られていたくすり。

本資料は萬金丹に配合される薬種とその分量を記したもので、園田家萬金丹の元祖とされる園田為恒（一七九八〜一八六三）の名がある。

23・人參六味丸引札 一枚

縦三二・〇cm 横四二・八cm
江戸時代 館蔵 里内文庫

引札は、現在のチラシにあたる。園田家で売られていた薬のひとつ人參六味丸について、その効用や服用の仕方、値段などを記す。

冒頭から「第一腎の水を増し諸病悉く治する名劑」とし、胸の痛みから婦人病、腰や膝の痛み、痔などまで、何にでも効き、不老長寿を保つと解説されている。

末尾には「江州三上山南面出庭村 薬屋喜兵衛製」とあり、商号にもされた三上山が意識されている。

24・上戸山中村家方丸薬製法書 一通

縦一五・六cm 横四一・九cm
江戸時代 館蔵 里内文庫

園田家の中興とされる為名と、萬金丹などを園田家で最初に調べたとされる為恒との連名で、上戸山村（現 栗東市上砥山）の中村家に伝えられた丸薬の処方調べ記したもの。

天保七年（一八三六）に調査し、天保一〇年に園田松五郎に伝授したとされる。

25・川崎翠松軒版木 一括

江戸時代 館蔵

川崎翠松軒は、江戸時代、下戸山村（現 栗東市下戸山）で営業していた薬屋。「万治膏」という名の膏薬（煉り薬）と、「御目ぐすり」という名の目薬を商っていた。

下戸山村は街道筋の村ではないが、東海道から金勝道に入れば、東海道目川立場（現 栗東市岡・目川）からもさほど遠くなかった。「万治膏」の引札に「目川ヨリ十丁東」と記されるなど、街道を意識して販売されていた。

・万治膏引札版木 一枚（縦一五・六cm 横二二・四cm）

「万治膏」は瘰癧などの化膿やできものをはじめ、頭痛や肩こりなど万事に効くとされた膏薬（煉り薬）。

末尾には「本家調合所 江州栗田郡（目川ヨリ十丁東）下戸山村 川崎翠松軒」とある。

・万治膏紙看板版木 一枚（縦四二・三cm 横一四・九cm）

・御目ぐすり紙看板版木 一枚（縦四二・三cm 横一五・〇cm）

紙看板は、今でいうポスターのようなもの。室内の壁などに貼られた。商品名とともに効用が書かれる。

「万治膏」は頭痛、肩こり、疝気（腹痛）、ひび、あかぎれ、しもやけ、やけど、切り傷、くさ（できもの）の類一切に効くとされ、「御目ぐすり」はよろず目のわずらいによしとされる。

・万治膏包紙版木 一枚（縦一七・〇cm 横一三・〇cm）

・御目ぐすり包紙版木 一枚（縦一七・二cm 横一三・三cm）

包紙（薬を包装する外袋）の表に刷られた。

・御目ぐすり効能書版木 一枚（縦一六・八cm 横一五・五cm）

包紙（薬を包装する外袋）の裏面に刷られたとみられる。

26・免痘散版木 一枚

縦一七・二cm 横四〇・〇cm
江戸時代 館蔵 里内文庫

東海道筋の伊勢落村の徳生寺で作られていた「免痘散」の効能や由緒を刷る版木。薬の名の通り、痘瘡を中心に何にでも効くと書かれる。配合成分は「ある人の大家伝」とするのみで明かさないが、これが明治までの通例であった。

印面は摩滅が目立ち、かなり使い込まれたようである。

文末の「江州石部草津間伊勢落村徳生寺製」（石部宿と草津宿の間にある伊勢落村の徳生寺の製品）という表現は、多分に街道を意識している。

(釈文)

免痘散

夫痲瘡ハ諸人ののがれざる所にして
子をもちたる人これを愁ざるはなし
しかるに此薬を■年■へ用ひおく時ハ
一生痲瘡の愁なし予ニ一ツいたすもの
ありともいたつてかるき事妙也
元来此薬ハある人の大家伝にして予
是を■見るに誠ニ其効能の妙
なる事をする故此方を予ニ授へき事を
数年もとむといへどもさらにゆるさず
しかるに今度何とかしけん予をひそか
にまねきあきらかに伝へけり誠ニ世に
ならびなき大妙方也用ひて■妙を
しるへし

此薬用ひやうハ風にてもひしか又ハむしにても
いでのか何なりとも少しやまいのいでたる
時にさゆにて用ひおくへしきぶんよろ
しき時用ひてハ其しるしあし

江州石部草津間

伊勢落村

徳生寺製

27・仙伝虫脱丸紙看板 二枚

縦五一・五cm 横一七・二cm / 縦七八・二cm 横二六・八cm

近代 館蔵 里内文庫

仙伝虫脱丸は、東海道筋手原村(現 栗東市手原)の猪飼家で製造販売され
ていた薬。癩癧(発作的なひきつけなど)や驚風(小児脳膜炎などの類)、疳の
虫(夜泣きやひきつけなど)、当時体内に住まう「虫」によって引き起こさ

れると考えられていた諸症状に効くとされた。

紙看板は店内に宣伝のために貼られた、今のポスターのようなもの。

28・仙伝虫脱丸包紙 一点

縦一六・六cm 横八・九cm

近代 館蔵 里内文庫

東海道筋手原村(現 栗東市手原)の猪飼家で製造販売されていた仙伝虫脱
丸のパッケージ。

展示品は「官許」の文字などから明治以降のものだが、仙伝虫脱丸は享和元
年(一八〇二)に当地を通った大田蜀山人も『改元紀行』にその存在を書き残
しているなど、江戸時代から販売されていた薬であった。

29・糺村膏薬法書 一冊

縦二四・四cm 横一六・九cm

江戸時代 大宝神社蔵

糺村膏薬は地黄、肉桂などの漢方薬を胡麻油などと混ぜ合わせて煮たもの。
本書はこれを最初に売った店は大宝神社の鳥居の南にある薬屋西田源兵衛の屋
敷であるとする。

西田源兵衛は大宝神社の社家神応院(西田姓)の分家で、幕末から明治初頭
の大宝神社周辺を描いた「糺村講株絵図」にも「薬屋 西田源兵衛」として登
場する。

筆跡等から、幕末の神応院禪院によって記されたものとみられる。

《大田蜀山人『壬戌紀行』享和元年(一八〇二)より》
かさ川村をすぎて右に大寶天王宮あり。左にへそ村膏薬ありて栗本郡中村氏製
とあり

30・大宝山佛眼寺丸方書

一通

縦二七・八cm 横六二・〇cm

江戸時代 元治元年（一八六四） 大宝神社蔵
 大宝山仏眼寺丸は、名前のとおり大宝山の山号をもつ仏眼寺ゆかりの丸薬。

大黃や丁子といった漢方薬を仏眼寺の本尊に供えた仏飯で練り上げるとい
 ので、本尊より授けられた秘薬とされた。麻の実ほどの大きさで、一剤五分三
 十二文と価格も定められているが、実際に販売されたかは確認できない。

元治元年（一八六四）、佛眼寺の住職信道の入寺に際し、大宝神社別当の神
 院禪覚から与えられたもの。

31・神応丸版木

一枚

縦一二・一cm 横一〇・〇cm

江戸時代 個人蔵

神応丸の名は、疫病などとも関わりの深い牛頭天王をまつた大宝天王宮（大
 宝神社）の別当神応院からとったのであろう。

神応丸を製造した西田清左衛門家も、大宝神社の別当神応院とゆかりを持つ。
 幕末の神応院、禪覚の名は大宝山仏眼寺丸にも名がみえており、幕末における
 畿周辺の製薬の背景には、神応院の存在があるようである。

32・綾村旧領絵図

一舗

縦一三五・二cm 横一一二・一cm

江戸時代 大宝神社蔵

縦に太く描かれる道筋が中山道。道の左右に黄色く塗られた場所が集落を示
 す。上が守山宿方面、下が草津宿方面である。

上方に左右に青で太く描かれた水路と中山道の交わる右下に赤で大きく囲ま
 れた場所が大宝天王宮（現 大宝神社）で、薬屋源兵衛家（明治以降の西田薬
 舗）は、大宝神社の鳥居の南にあった。また神応丸を製造販売した西田清左衛
 門家は、大宝神社の敷地の右下にあたる。

綾村は三人の旗本の旗本の支配をうけ、集落以外は支配者別に三色に塗り分けてい

る。

33・渋川村中沢村入組所絵図

一舗

縦三三・九cm 横四九・二cm

江戸時代 館蔵 里内文庫

中沢立場（現 栗東市中沢）は中山道草津宿と守山宿の間にあり、三方を渋
 川村に囲まれた中沢村の地所であった。

街道沿い草津寄りの「五畝拾四歩 中沢村 嘉助」と注記のある屋敷が、中
 沢立場の小休本陣を兼ねた和中散の出店。織田彦十郎の経営した店を前身とし、
 文化四年（一八〇七）までに中沢村に移転、天保八年（二八三七）には嘉助が
 経営するようになった。

近年まで、やや傾斜のある中山道のこのあたりは「出店の坂」と称されてい
 た。



▲綾村旧領絵図

【11】医師とくすり

江戸時代の医師は医学を京都や長崎などで学び、その技術を修めた人たちがあつた。彼らは患者を診断するとともに、その症状にあわせてみずから薬を調合して与えていた。近代以降になると医師と薬剤師とが資格免許によって区別され、医師による薬の調査はなされなくなる。

また、僧侶らも古くから医療に携わってきたが、信仰との結びつきから、おまじない的な要素を多分に含んでいることも多い。ここでは江戸時代や近現代に栗東市内で行われていた医療について紹介していく。

34・医師鎌田右内関係資料のうち 薬種箱 一箱

縦二八・二cm 横三九・〇cm 高一五・五cm

江戸時代 個人蔵

江戸時代、目川村で開業した医師鎌田右内（一七四四〜一八〇二）の所持品。右内は阿波徳島に生まれ、京都で儒学・医学を学んだ。村の生活において右内のような医師の存在は重要であつた。

薬種箱のなかは整然と分類された薬種が並んでいる。

35・医師鎌田右内関係資料のうち 薬匙 二本

江戸時代 個人蔵

鎌田右内の医療用道具類のうち。薬の調合の際に用いていた。

36・医師鎌田右内関係資料のうち 圧尺 二本

江戸時代 個人蔵

薬の調合の際、薄紙をおさえるおもりにするもの。

37・医師鎌田右内関係資料のうち 薬研 一組

江戸時代 個人蔵

乾燥させた薬草類を刻んで粉にするための道具。



▲医師鎌田右内関係資料のうち 薬種箱

38・医師鎌田右内関係資料のうち 乳鉢 一口

江戸時代 個人蔵

薬種をすりつぶし、きめ細かい粉にする道具。

39・医師鎌田右内関係資料のうち 経絡人形 一躯

像高四九・五cm

江戸時代 個人蔵

和紙でつくった張子人形に墨や朱、青、黄などで彩色し経絡を示したもの。いわゆる「ツボ」も示しており鍼灸治療に活用される。

40・往診用薬箱

一箱

縦二七・〇cm 横四〇・八cm 高三四・三cm

江戸時代 館蔵

旧甲賀町で代々医師を勤めてきた家に伝来したもの。往診に向かうための担い棒を通す金具が付けられている。その場で薬を調合するため薬匙や圧尺なども備え付けられている。納められた薬種には「木通」（あけびの漢名）や「羌活」（ウドの若根）、「国老」（甘草の異名など）一四袋とサルノコシカケや鹿角の黒焼きが確認される。

41・灸道具

一式

明治時代～昭和 個人蔵

栗東市内のお寺で昭和二六年（一九五二）ころまで使用されていたもの。数種類の薬種を二合の水で一合になるまで煎じ、それで墨をする。その墨を患部にチョンチョンとうちつけ、最後に白粉を塗って墨を乾かせる。子どもの夜泣きや手足の痛みなどにきくといわれ、多くの人が訪れたという。

【三】医薬の近代化と売薬のひろがり

明治三年（一八七二）、明治政府は「売薬取締規則」により、以前から広く売られてきた「売薬」について、神仏の靈験をかたることや、「勅許」「家伝」「秘法」などの文句を宣伝に用いることなどを禁じました。西洋医学の考えを取り入れた上で、今までの薬は検査による販売許可制とし、成分や効能などを明らかにして発売するものとしたのです。また薬品販売や製薬に携わる人の免許制度も整えられました。

これらの政策により、途絶えた薬は多くありました。しかし人々の生活に売薬は深く浸透しており、やがて新薬配合の売薬も登場するなどして、発展を続けました。

薬をめぐる制度の近代化

ここで取り上げる資料は、主に江戸時代から出府村にて薬の製造販売を行っていた園田喜兵衛家に関わるものです。明治政府の出した新しい制度に応じて、さまざまな申請書類が提出されています。

42・諸薬品買入并製薬高書上

一冊

縦二四・六cm 横一六・四cm

明治六年（一八七三） 館蔵 里内文庫

江戸時代から薬種・売薬業を営んだ園田家の、明治三年（一八三〇）から五年までの「和薬」「漢薬」「洋薬」の買入れ高、ならびに明治三年における「萬金丹」「人參六味丸」「黒丸子」の生産高を記す。表紙に記された園田喜三郎（のちの喜兵衛）の年令から、明治六年の初夏頃に作成されたもの。

明治六年六月、政府は各府県所産の薬品金属等について明治三～五年の三年間の生産高明細書を提出するよう命じた。本文書は、これに応じて作成されたとみられる。

43・葦種并売薬取調書目録

一冊

縦二六・二cm 横一八・三cm

明治七年(一八七四) 館蔵 里内文庫

明治六年(一八七三) 四月、政府は各府県下の薬店業者の姓名、軒数等の取調べを命じた。本資料はこのとき作成された滋賀県下の葦種、売薬業者の名簿で、履歴等の必要書類の提出について朱で確認が記される。

栗太郡には二二名があり、現在の栗東市域からは手原村の猪飼左太良と正三良、出庭村の園田喜兵衛、辻村の田中弥兵衛、六地藏村の大角弥右衛門と嶋林八郎兵衛、綾村の西田源兵衛の七人の名がみえる。



44・萬金丹・黒丸子不許可通達

一通

縦二八・〇cm 横二七・二cm

明治八年(一八七五) 館蔵 里内文庫

明治三年(一八七二)に出された売薬取締規則により、従来の薬は検査を経て許可を得たもののみ製造販売できることになった。

本資料は、出庭村で代々葦種・売薬業を営んできた園田喜兵衛から申請された「萬金丹」と「黒丸子」について、当時売薬検査等を管轄していた文部省から、発売は認めがたいと不許可の回答がなされたものである。もともと、翌年には萬金丹、黒丸子とも販売が許可されることになった。

45・萬金丹効能書

一冊

縦二五・七cm 横一八・一cm

明治時代 館蔵

冒頭に「明治九年子七月十一日 官許方」と記されている。明治九年(一八七六)に政府より萬金丹の発売が許可され、その内容を踏まえて書かれた効能書である。

具体的な原材料やその分量のほか、主な効能、用法などが詳しく記されている。

46・売薬行商鑑札願書

一冊

縦二四・九cm 横一七・三cm

明治一〇年(一八七七) 五月一日付 館蔵 里内文庫

園田喜兵衛が、自らの製造する萬金丹と黒丸子の行商をするための鑑札を、滋賀県に願い出たもの。売薬営業以外でも、請売(委託販売)や行商などに鑑札が必要とされた。

文末に朱書で、鑑札許可の決定と、鑑札料については追って連絡するとの旨が記されている。

47・売薬営業鑑札満期御書替願 一冊

縦二四・三 cm 横一六・八 cm

明治一四年(一八八二)五月一日付 館蔵 里内文庫
園田喜兵衛は萬金丹と黒丸子について、明治九年(一八七六)に売薬検査をうけ、売薬営業の鑑札を得ていた。五年を経た明治一四年六月に有効期間が満期となるため、滋賀県に対して明治一四年(一八八二)五月一日付で書替えを願ひ出、一三日付で萬金丹、黒丸子とも書替え再交付が許可された。

48・鑑札領収書差出二付達書 一通

縦二四・六 cm 横一七・一 cm

明治一四年(一八八二)五月二五日付 館蔵 里内文庫
新しい鑑札が発行されたことが、栗太郡役所、出庭村戸長を通じて連絡されている。新しい鑑札の受取に際しては、本人から県令にあてて領収書を提出するよう求めている。

49・売薬営業鑑札拝受書 一通

縦二四・一 cm 横三三・一 cm

明治一四年(一八八二)五月二八日付 館蔵 里内文庫
園田喜兵衛から滋賀県令にあてて出された、萬金丹と黒丸子の鑑札の領収書。

50・葦種類取扱品取調書 一冊

縦二三・五 cm 横一六・五 cm

明治一六年(一八八三)六月 館蔵 里内文庫
本資料によると、明治一六年(一八八三)時点で園田家の取扱った薬の品目は、和薬八七種、舶来薬二七九種、合計二六六種にのぼる。
明治三年(一八七〇)には、薬品の買入れは和薬九八種、漢薬五七種、洋薬五種、合計一六〇種であったから、取り扱う品数は一五年足らずで一〇〇種ほども増えたことになる。

舶来薬には、従前からの漢方薬系の薬種だけでなく、塩酸やマグネシウムなどの化学物質も含まれるようになってきている。

園田家で扱われた薬品の数

	和薬	漢薬	洋薬
明治3年(1870)	98種	57種	5種
明治4年(1871)	82種	40種	5種
明治5年(1872)	56種	30種	4種
明治16年(1883)	87種	(舶来薬)179種	

(参考) 園田家の薬の生産高

	萬金丹	人參六味丸	黒丸子
明治3年(1870)	2貫800目 (10.5 kg)	7貫目 (26.25 kg)	150目 (約0.26 kg)
明治9年(1876)	(官許を得る)		(官許を得る)
明治19年(1886)			(廃業)
明治22年(1889)	5貫500目 (約20.63 kg) (売上高 550円)		

江戸時代の園田家の主力商品は「萬金丹」「人參六味丸」で、そのほかに「黒丸子」「奇心丸」などを販売していました。「萬金丹」と「黒丸子」は、明治九年に売薬営業の鑑札を得ていますが、「黒丸子」は明治一九年に廃業しています。明治二〇年代初頭には、白米十kgが四六銭(〇・四六円)程度で買えたといいますが、明治二二年の「萬金丹」の売り上げは、現在のお金に換算すれば三五〇〜四〇〇万円といったところでしょう。

51・売薬請売鑑札願書

一冊

縦二七・九cm 横一九・八cm

明治一〇年(一八七七)五月一日付 館蔵 里内文庫
園田喜兵衛が売薬の免許を得ていた萬金丹、黒丸子の二つの薬を、東海道筋の手原村(現 栗東市手原)の里内新助が販売したいとして、滋賀県に願い出ている。

里内家と園田家とは姻戚関係にあり、その縁から販売することになったとみられる。

52・売薬請売約定書控

一通

縦二七・一cm 横一九・三cm

明治時代 館蔵 里内文庫
園田喜兵衛が売薬の免許を得ていた萬金丹につき、請売りの話がまとまったので、請売鑑札を願いうけ、その鑑札免許の期限内においては、売薬に関する規則やお達しを守って商売すると約束する内容。

請売りの話がまとまれば、このような契約が交わされたとみられる。

53・売薬廃業二付願書

一冊

縦三三・九cm 横一六・六cm

明治一四年(一八八二)五月二八日 館蔵 里内文庫
園田喜兵衛が許可を得ていた萬金丹、黒丸子の二つのくすりのうち、黒丸子の売薬営業を廃業する旨を願い出ている。同日付で聞き届けられ、鑑札も領収されている。

54・調剤用具

一式

昭和初期 個人蔵

昭和一〇年代ごろまで大阪にあった薬屋ゆかりの資料。当時の調剤はすべて薬剤師による手作業で、配合する各薬を秤ではかり、それらすべてあわせて乳鉢すり混ぜ、一回分ずつスプーンで計量して薬包紙に包んだ。

ここにある秤(上皿天秤)は少量をはかるものだが、病院など大規模な調剤を行うところでは、棹秤や、洗面器ほどの大きさのある鉢を使用し、食卓テ-

ブルほどもある机に薬包紙をずらりと並べて作業していたという。

55・西田薬舗看板

一括

近代 館蔵

およそ戦前頃まで、薬局は店先にずらりと看板を掲げた。

本資料を伝えた西田薬舗は、江戸時代の薬屋源兵衛家の流れをくみ、第二次世界大戦ごろまで営業した。伝来の看板から、滋賀県内では蒲生郡などのほか、遠方では東京や大阪、京都、伊勢(三重県)、讃岐(香川県)など、各地の有名売薬を取り扱っていたことがわかる。展示はその一部。

上に吊手、左右に持ち手がついているものは、朝に軒先にぶら下げ、夜には店内に取り入れた。横型のもは、庇などに掲げられた。

・「感心丸」看板 (縦二二七・八cm 横五一・一cm)

軒先にさげられていた看板。「感心丸」は、滋賀県内では甲賀と並ぶ薬の生産地であった日野の「吉村養寿堂薬館」による薬。裏面は「正産湯」の宣伝になっている。

・「胃活」看板 (縦一四四・六cm 横五六・三cm)

軒先にさげられていた看板。裏面は「ロート目薬」の宣伝になっている。このころになると全国規模で販売される薬が多く、「胃活」は当時広く知られた胃薬のひとつだった。



《東京大空襲の前後の日々を記した内田百間の日記『東京焼盡』》

昭和二〇年六月三日より》

下痢止めは売薬で沢山にて小林博士の薬局を煩わす迄もないから、もし何か買へたらその事はお願ひしなくてもいいと云った。買つて来いといつたのは時代遅れ乍ら昔からの馴染みのヘルプを第一としビオフェルミン、わかまつ、梅肉エキス等又序に胃活胃散もあつたら買つておく。その外蚊の食つた後につける痒み止めのクリーム等をメモにして家内に持たせてやった。

・「安神湯」「健胃散」看板 (縦四五・六cm 横二二・一cm)

・「健脾圓」看板 (縦四七・九cm 横二二・一cm)

「安神湯」「健胃散」は大坂の、「健脾圓」は伊勢(三重)の薬。

薬の名で「湯」がつくのは煎じて飲む薬。「散」は粉薬。「圓」は丸剤、散剤のうち薬の作用が強く使用量の少ないものをさすことが多く、かならずしも薬が円や球形とは限らなかった。

・「アポロ」看板 (縦四四・六cm 横六三・五cm)

現状では中央がくりぬかれたようになっていて、当初はここに何か細工があつたのだろう。

「アポロ」は「最新完全防臭剤」をうたい、中央上方には「アナタごよういなさいましたか いやなほいもアポロの十滴 アナタの御意のまゝ」と書かれている。

・「浅田飴」看板 (縦四八・四cm 横九〇・八cm)

現在でもよく知られる浅田飴の看板。「たんせきに浅田飴 空腹にめし」とあり、痰や咳に対して、すきつ腹にご飯を食べるほどの効能がある、と宣伝している。

公衆衛生と教育

交通が発達し、人の行き来が活発になると、伝染病も広がりやすくなりまし
た。またいわゆる「文明国」として世界に認められるため、伝染病や寄生虫病
への対策は国の大きな課題となっていました。

明治以降、政府は病気の予防についても学校などを通じ、科学的な見地から
公衆衛生教育を進めました。病気の予防や対策への知識は、近代医療とともに
人々の健康を支える車の両輪となっていたのです。

56・眼病模型 一式

縦一九・五cm 横一六・五cm 高三・〇cm

近代 館蔵 里内文庫

57・トラホーム一席話 一冊

縦一八・八cm 横一三・〇cm

明治四五年(一九一二) 館蔵 里内文庫

トラホームは伝染性の慢性結膜炎。ひどくなると失明することもあり、戦後
しばらくまでその対策が課題とされた。

模型は、トラホームの進行した状態を解説するもの。

冊子は、身辺を清潔にし、汚い手で目をこすらないなど、日常的な衛生管理
を中心にトラホーム予防の要旨をまとめている。末尾に一〇番からなるトラホ
ーム予防の歌が付けられている。

里内文庫

里内文庫は、明治四一年(一九〇八)、現在の栗東市手原に開設された私立図
書館。

図書館は学校教育と並ぶ通俗教育の拠点とされ、里内文庫にも公衆衛生や医
薬に関わる資料が収蔵されていた。

昭和 館蔵（葉山小学校旧蔵）

戦後、学校教育の中に取り入れられた視聴覚教材のうち、スライドの台本。「ねずみ」「結核」「トラホーム」「寄生虫」など伝染病や公衆衛生にかかわるテーマが含まれる。病原体や感染経路、予防接種などの知識や、手洗いなど日常的な衛生管理の大切さを伝える内容となっている。

また「今日、世界の文明国の中で、日本ほど、寄生虫病の多い国はありません」（「寄生虫」と述べられるなど、衛生教育が単に国民の健康上の問題であるだけでなく、文明国として国際的に認められるための国家的な課題であるとの認識がうかがえる。

庶民の味方 置き薬

置き薬は、業者があらかじめきめられた薬を家庭におき、定期的に販売員が巡回して、使った分だけ代金を請求するというもの。家庭に常備され、必要なときにすぐ使える置き薬は人々の強い味方でした。ちょっとした病気であれば、置き薬で対処することも多かったのです。

全国的には富士の薬売りが有名ですが、栗東では甲賀郡の業者も多く来ていました。

59・薬箱	一箱	（縦二・八cm 横二・七cm 高一〇・八cm）
60・スパーク	一包	
61・赤玉はら薬	三包	
62・解熱トンプク	一包	
63・六神丸	二包	
64・強力セメンエン	六包	
65・セキトール	一包	
66・薬価計算書	一通	

いずれも昭和 館蔵

栗東市六地藏で使われていた置き薬の薬箱。「担当員／甲賀郡甲南町野田／倉谷長生堂薬房」とあり、甲賀郡の業者のもの。引き出しではなく、スライド式の蓋のついた木箱である。

「スパーク」「赤玉はら薬」「解熱トンプク」「六神丸」「強力セメンエン」「セキトール」など中におさめられた薬は、いずれも甲賀郡内の製薬会社の製品で、こうやって地元の薬を置き薬として配置した。

清算時の薬価計算書も残っている。



67・薬箱 一箱

縦一六・五cm 横二〇・九cm 高九・〇cm

昭和 館蔵

栗東市六地藏で使われていた置き薬の薬箱。「甲賀郡佐山森地健勝堂」とあり、甲賀郡の業者のもの。引き出しは一段だが、木製のしっかりとしたつくりの箱である。

68・薬箱 一箱

縦一九・五cm 横二二・七cm 高一二・〇cm

昭和 館蔵

栗東市高野（小坂）で使われていた置き薬の薬箱。「甲賀郡甲南町礪尾長生堂」とあり、甲賀郡の業者のもの。昭和一五年ごろまで使用されていた。

- 69・薬箱 一箱（縦一八・九cm 横二三・六cm 高一六・五cm）
 70・人参実母散 一箱
 71・昭和メンタム 一箱

昭和 館蔵

栗東市織で使われていた置き薬の薬箱。「越中富山」「株式会社広眞堂」「杉政正一薬房」などの文字が見え、富山から来ていた業者のもの。引き出しは上下二段で、上段には間仕切りがある。

「昭和メンタム」二箱と、大正六年の年記のある売薬印紙を貼り付けた「人参実母散」一包とが残っている。

- 72・犀角 一箱
 73・赤玉神教丸 一箱
 74・マーキョクロム液 一箱

昭和 館蔵

「いとや」と称した店で購入されたもの。犀角は解熱剤として使用した。医者に処方される薬に対して、身近な店で購入する薬は「売薬」と総称され、ちよつとした病気などの際に利用された。

【四】民間療法の世界

民間療法は人びとの長い経験の蓄積のもと伝えられてきた方法である。薬草、薬木などを用い、病気や怪我を治癒させるものである。同時に薬草が手元にならない場合の応急処置法も考案された。これはおまじないに近く、近代化とともに合理的な応急処置法へと変わっていく。

また、薬においても近代化は推進された。欧米諸国から薬品が輸入され、日本古来の民間療法は否定されていくかにもえた。しかし、軍事制度が整備されていくなか、戦争と地域社会の接点において民間療法は見直され、根強く生き続けることとなった。

75・妙薬法書入包紙 一紙

江戸時代 個人蔵
さまざまな妙薬や応急処置のメモ書を、一括して包んでいた包紙。このようなメモ書は、出かけるときなど懐にしまいやすいよう小さい紙切れに記していた。

76・ムネムシツカエノ妙薬 一通

縦一六・二cm 横八・〇cm
江戸時代 個人蔵
胸のつかえの妙薬。まず乾姜、芍薬、茯苓、陳皮、甘草、肉桂を少々、水一合半に入れる。これを一合になるまで煎じ、最後に水飴をひとさじ混ぜて一杯分の薬ができる。

77・風妙薬 一通

一五・六cm 九・一cm
江戸時代 個人蔵
風邪薬の薬種を書きとどめたもの。羌活、紫蘇、葛根、蒼朮、川芎、香附子、甘草、陳皮、生姜など現在もよく知られるものが多い。

78・妙法 一通

二四・七cm 三四・五cm
江戸時代 個人蔵
からだのむくみに効く妙薬の処方。きゅうりの根をよく洗い、甘草などとあわせて煎じ用いるもの。

79・妙薬の歌 一通

縦一五・七cm 横三八・六cm
江戸時代 個人蔵
典型的な民間療法で、憶えやすいよう歌にしてある。牛に水の中を渡らせる時、のどに骨がひっかかった時、出血した時などの対処法が記される。いずれも生活感ある庶民的な対処法といえる。

(釈文)

大水の中へ牛やりかた
せはき道ひろく渡れよ黒のこま
伯楽天かつき候てまします

のんと二ほねたちたる時
いせの漬あこ木のうらのあミの子
あミの子なれとぬけもせよ

血留の歌
血の道ハ父と母との血なりけり
此血をとめよちの道の神

一まむしさしたるには、青(あお)たばこの
はをきてよし
青たはこなき時はしやうゆうもよし

一はちのさしたるには

とうがらしすりき男ハ女の油の
手ふき紙にてなて、よし

又女ハ男の手ふき紙にてよし

一はな血いつる時ハさきの人の右

なら此方の右のきんにきりてよし

又左ならハ左のきんにきりてよし

女の留ル人ならハち、を右の通
にきりてよし

80・てんかんきやうぶつこの妙薬

一通

縦一七・二cm 横二二・五cm

江戸時代 個人蔵

芝原柳翁軒が販売している薬。服用法が特徴的。膏のうちに家の東方で水を汲み、月星の影を映しておく。この水で朝日の出る方角に向かって薬を飲む。一包で七日間の服用ができる。ただし油気類は合わないため禁物とされている。

81・通俗家庭療法

一冊

縦一三・七cm 横八・四cm

大正七年(一九一八) 館蔵 里内文庫

家庭における治療法について解説したもの。近代以降の応急処置法は、近代医学に基づいた合理的方法がとられている。

82・消毒薬販売御願書

一冊

二四・三cm 一六・七cm

明治一四年五月五日(一八八二) 館蔵里内文庫

薬舗園田喜兵衛が滋賀県に消毒薬の販売許可を願いだしたもの。当時、消毒薬は主に伝染病予防のために販売され、地域の衛生問題には薬屋の存在が欠かせ

なかつたであろう。

83・「戦友」第一四八号

一通

縦二八・四cm 横二〇・九cm

大正一一年(一九二二) 館蔵里内文庫

滋賀県では明治にはいつて最初に伝染病が広まったのは、西南戦争の帰還兵によるものであった。戦地で感染し、帰還後に地域社会に広まったのだ。地域と近代戦争との接点に伝染病の問題があつたのである。本資料によると、腸チフスは日清戦争の従軍総死者の約六分一を占め、日露戦後には同じく三分一に増加したという。

84・時局ト森林薬用森林植物

一冊

二二・〇cm 一四・八cm

大正六年一〇月(一九一七) 館蔵 里内文庫

第一次世界大戦下での民間療法の見直しにより、農商務省山林局が作成した薬用植物などの一覧。薬草などを中心とした民間療法が見直されるのは政府の主導もあつたが、それだけ民間療法が長い歴史を民衆とともに重ねてきたことの裏返しでもあつた。

八五・天授秘薬民間療法第一輯

一冊

一四・六cm 一〇・〇cm

大正一〇年一月一日(一九二二) 館蔵 里内文庫

近代医学の浸透により民間療法は否定されていくかに見えた。ところがはからずも第一次世界大戦(一九一四〜一八)が民間療法の見直しを推し進めることになった。本資料によれば大戦によりヨーロッパから薬品の輸入が減少したため「再び日本在来の薬草薬木の必要」が認識されたという。ここに再び民間療法が脚光を浴びることとなった。

縦二七・六cm 横三九・三cm

昭和 館蔵 里内文庫

さまざま薬用植物とその効用を一覧にしたもの。民間療法は「充分ノ発達ヲシテ居ラヌ」としながらも、記載された植物は「採取容易ナルモノヲ主」としている。自給自足を前提とした戦時下での薬のありかたがうかがわれる。

【スポット】病とまじない

江戸時代、信仰やまじないと医療は境を接し、ある面においては混じり合っ
てさえいました。明治になると、いわゆる科学的な見地からの医療と信仰の世
界は分けられ、こうして神仏のご利益や信仰などは、現在では医療や薬とは別
のものとするようになりました。

しかし、現在でも聞き伝えられている中には、医療と信仰がまだ未分化で
あつたころの痕跡を残すものもあります。

神仏への祈願をしたり、お守りを持ち歩くなど、苦痛から逃れたい、あらゆる
手段をためし、頼りたいという気持ちは、いつの時代も変わらないのかもし
れません。

87・安産神符

一点

縦三・五cm 横五・八cm

江戸時代 大宝神社蔵

安産のお守り。「神祇学頭源雅胤」とは白井雅胤のことで、江戸時代中期の白
川神道（伯家神道）説の樹立者。この神符が白川神道の流れをくんでいること
がわかる。

88・疫禊守

一点

縦一一・三cm 横一八・四cm

江戸時代 大宝神社蔵

文言からすれば疫病などをはらうための護符と思われる。「八雲立つ八重垣は
妻隠（籠）に、八重垣造るその八重垣え」とは日本書紀に載せる素盞鳴尊の歌。
稲田比売尊を妻に迎えるため新しい家を建てる時に詠んだもの。その二人に「守
幸給」と唱えている。

縦五二・〇cm 横三九・六cm

近代 館蔵 里内文庫

近江国水口町（現 甲賀市水口町）の松尾願隆寺でおこなわれた、ぜんそく封じの行事の案内。

へちま一個を持参のこと、とあるが、へちまは中国では食用のほか漢方薬としても親しまれ、咳をしずめたりするほか解毒や殺菌作用も期待された植物であった。

こういった宗教行事は、現在では医薬とは別とみなされるが、かつては当時の薬効知識などとも関連して行われていた面もあるのだろう。

かつて疱瘡（天然痘）は、子どもがかかれば命取りになりかねない流行病として恐れられました。種痘が普及するまで、天然痘を防ぐ確実な手立てはなく人々はせめてまじないに頼り、疱瘡にかからないよう願いました。

疱瘡神は赤色を嫌うとの考えから、疱瘡神を追い払うため、赤色と関わるまじないものが各地に残されています。

90・疱瘡妙方

一通

縦二四・七cm 横三二・〇cm

享和二年（一八〇二） 個人蔵

疱瘡に効く薬として、アヒルの卵、赤小豆、燕の糞、金箔などを湯に入れてかき混ぜ、その液体で子どもを撫で洗うとよいとする。

疱瘡は、赤い発疹を伴うことから、赤く丸いものが連想されている。燕の糞の代用とされた鼠の糞などは逆効果とも思えるが、それだけいろいろなことが考え試されるほどに、疱瘡を免れたいという思いは切実だったというべきだろう。

しかし当然ながら、こういったものは現代的な意味での薬効はなく、明治以降は俗信として否定されていった。

（积文）

稀痘妙方

一鴨卵一箇

一燕屎三箇

もし此品なき時は
鼠のふん三ツ入てよし

一赤小豆三粒

一酒少許

一金箔三枚

内二枚ときて入へし一枚のけをき
はうそうの時さゆにて用ゆべし、食す、ミよし

右五品を調へ小児出生七夜之内二つかハすべし、扱其仕様ハしろ水

を二日前よりたくわへ置、ゆにわかしたらいへうつし、其中へ此五品の薬を入よくくかきまぜやそかる手ぬぐいをもつてあたまかおより一身をよくなであらうべし、さむき時ハたらいをやめすへふろにてつかうべし、但小児出生七夜の内二かきらず五才十歳以上にてよし、

一剤にて幾人にてもつかハすべし、此名方ハ皆々の間のたいどくを

さるゆへに痘瘡かならずかるく也、或人こゝろミに左のかいなをあらいのこし置くに痘瘡の時左のかいなばかり別によけい出へし也、まことに伝来のきほうなり、信して用ゆべし

享和二戌年三月日

91・狸々人形

一式

高一四・四cm

館蔵

本資料は、東海道と中山道の分岐点であった草津宿で売られていた張子の人形。

題材となる狸々は、中国の酒の精霊で、上に真紅の衣をまとい、右手にひしやく、左手に杯を持って、酒樽の上に立つ。隣にはやはり赤色のだるまを添え



▲栗東市縵(へそ)あたりでは、赤色に染めたしんこ団子(米粉の団子)を供えた。(写真は再現)

る。
 疱瘡神は赤色を嫌うとの考えから、この人形をさらに赤い敷紙の上に乗せ、
 棧俵の上に乗せて疱瘡送りにつけた。供物にもやはり赤にちなんだものが使
 われ、地区により、赤飯や赤く色づけしたしんこ団子などがあった。

(凡例)

- 一、本冊子は、特別陳列「栗東とくすり」の展示解説を編集したものである。
- 一、本展示は、栗東歴史民俗博物館学芸員松岡久美子(全体構成、第一・三章、スポットのうち87〜89以外)、同資料調査員山本順也(第二・四章、スポットのうち87〜89、積文が担当した)。
- 一、収録の積文は、原則として現行の字体に統一した。また、■は判読不能を不す。
- 一、異体字については、文中、和分散の大角家の「角」の字は、五角目が下まで突き抜ける。

(謝辞)

本展示の開催にあたり、下記の皆様方をはじめ多くの方々のご協力を得ました。記して御礼申し上げます。(敬称略、順不同)

大角重一 大角弥右衛門 鎌田一郎 川崎愛作 北川栄 小山健夫 島田忠次 園田喜一
 西田和子 西田耕之助 西田達也 西田博 西田昌子 林茂彦 水野元昭 山本真次
 大宝神社

(主な参考文献)

- ・『大阪製薬業史』大阪製薬同業組合事務所 一九四三年
- ・シーボルト『日本』中井品夫・斎藤信 訳、雄松堂書店、一九七八年
- ・『目で見るくすりの博物誌』内藤記念くすり博物館、一九八二年
- ・日本薬史学界『日本医薬各品産業史』薬事日報社、一九九五年

特別陳列「栗東とくすり」解説集 二〇〇六年三月

(編集発行) 栗東歴史民俗博物館

〒五二〇―三〇二六 滋賀県栗東市小野二二二―八

<http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan/>